

DUO 76/45

SUMIKO YOSEYAMA & MAL WALDRON

SIDE 1

- 1. ROUND ABOUT MIDNIGHT** 6' 44"
(Thelonious Monk)
- 2. ALL OF YOU** 2' 58"
(Cole Porter) BUXTON HILL MUSIC CORP.
- 3. TEACH ME TONIGHT** 3' 51"
(Sammy Cahn-Gene De Paul) LEEDS MUSIC CORP.

SIDE 2

- 1. MISTY** 4' 31"
(Erroll Garner-Jonny Burke) VERNON MUSIC CORP.
- 2. BODY AND SOUL** 5' 11"
(Johnny Green-Robert Sour-Edward Heyman-Frank Eyton)
CHAPPEL & CO., (LONDON) LTD.
- 3. YOU'D BE SO NICE TO COME HOME TO** 3' 00"
(Cole Porter) CHAPPEL & CO., INC.
- 4. WHAT A LITTLE MOONLIGHT CAN DO** 2' 10"
(Harry Woods) CINEPHONIC MUSIC CO., LTD.

SUMIKO YOSEYAMA (Vo.) / MAL WALDRON (p.)

日頃は第一家電をご愛顧いただき誠にありがとうございます。
「マニアを追い越せ大作戦」も会員の皆様の御支援のおかげで第24回目を迎える事が出来ました。厚くお礼申し上げます。
DAMオリジナル録音としては今回ピアノとボーカルのデュオを企画しました。
ピアノとボーカルのデュオはシンプルな組合せの為それぞれのアーティストに実力があり、聴かせ所を心えた魅力ある個性をかねそなえてなければ、このシンプルな組合せの持味を発揮し完成させる事は困難です。
この難題な要求を十分に満たしてあまりあるピアニストとボーカリストが今回のマル・ウォルドロンと与世山澄子さんです。
孤高のピアニスト、マル・ウォルドロンは不世出のジャズ・ボーカリスト「レディ・デイ」ことビリー・ホリデイの最後のそして最良の伴奏ピアニストでありました。
彼女の死後、歴史的なエリック・ドルフィー五重奏団の一員として活躍し、又作・編曲の才能を生かして映画音楽の担当をしたりと幅広く名盤をのこしたのちに、'65年米国をはなれ、ヨーロッパに渡り、ミュンヘンを中心に活躍の場を移し、'66年にはソロ・アルバム名盤「オール・アローン」を出しソロ・ピアニストとしても高い評価をえました。

来日も数多く、日本のアーティストとの共演も多く、いくつかの名盤をのこしています。又サインに必ず漢字で「同志」とか「幸福」など書けるほど日本語にもなれ親しんでいます。
マルのピアノは独特の深みと中低域に厚みのある重厚な魅力ある音で、演奏の内容も歌心を持った独特のフレーズで、聴きこむほどに持味の出る演奏を楽しませてくれます。
今回もセロニアス・モンクの名曲「ラウンド・アバウト・ミッドナイト」をソロで演奏してもらいましたが、名曲がマル独自の解釈と深みと余韻の美しい名演に仕上がったのではないかと思います。
ボーカルの与世山澄子さんは沖縄出身のキャリア十分な実力派ボーカリストで、活躍の中心が沖縄だった為か日本のジャズ界に名前が知れわたったのは最近ですが、歌唱力や雰囲気そしてなによりも歌の持つ心が伝わってくる本物を感じさせてくれるボーカルで、口さきだけで歌っているジャズ・ボーカル歌手がもてはやされている日本のジャズ・ボーカル界の中で、歌を楽しませてくれる数少ないジャズ・ボーカリストです。
マルと与世山さんのデュオは緊張感あふれるスリリングな演奏を展開し、ボーカルとピアノとがたがいに刺激あいデュオ本来の両者が力を出しあった演奏になり、完成度の高い名演を収録出来たのではないかと思います。

録音は9月17日・18日の2日間、東芝EMIの第3スタジオで実施、1インチ76cm/sec 2チャンネル・アナログ録音で、現在えられる最高の情報量をあます所なく収録しました。
録音は自然でバランスのとれた演奏を、2チャンネルでそのままとりましたので、録音もバランスよく仕上がりました。そこでカットティングも一切、加工せず録音時のデッキをそのままカットティングの送り出しデッキとして使用し、ノン・イコライザー、ノン・リミッターのハイレベル・カットティングをしております。
スーパーアナログ独特のふくらみのある豊かな低域と、余韻の美しい小音時のピアノ。そして自然で生々としたボーカルをオーディオ・チェックのポイントとしてチェックしていただければと思います。
又今回レーベルはスーパーアナログに相応しい落ちつきのあるデザインレーベルを使用しました。
ピアノとボーカルのシンプルなデュオの世界を十分に楽しんでいただき、皆様の愛聴盤として未長くお聴きいただければ幸いです。
最後に東芝EMIのスタッフの方々のご協力に感謝し厚くお礼申し上げます。

曲の解説とききどころ

☆ラウンド・アバウト・ミッドナイト

孤高のジャズ・ピアニスト、セロニアス・モンクのオリジナル曲中もっともポピュラーなナンバー。1944年のクーティー・ウィリアムス楽団の演奏が、この名曲の初レコーディングという。その時モンクとクーティーの共作とクレジットされていたが、本当はモンクの単独作品である。真夜中のブルーな雰囲気を上手く表現したモダン・ジャズの名曲中の名曲というべき作品であり、これら数多くの名演・名唱が存在する。代表的な作品は、この曲をそのままアルバム・タイトルにしたマイルス・デイビスの『ラウンド・アバウト・ミッドナイト』をはじめとして多数残っている。

ここでは、マル・ウォルドロンが、ソロ・ピアノを披露しているが、左手で弾く低音弦の響きが効果的であり、ダークでミステリアスなムードを醸し出している。その音像はマスを十分に感じさせながらも、輪郭がしっかりと置いていて暖味なところがなく、タッチのニュアンスを明晰に再現する高いクオリティを有しているといえる。マルのピアノ・スタイルもこの曲に良くマッチしており、なかなかの好演奏を聴かせてくれる。

☆オール・オブ・ユー

これはコール・ポーターの作品で1955年に上演されたミュージカル『シルク・ストッキングス』の中で使われた。1955年にはフレッド・アステア、シド・チャーリー主演のMGM映画『絹の靴下』に挿入された。同年にM J Qが『コンコルド』でレコーディングし、1956年にはマイルス・デイビスの『ラウンド・アバウト・ミッドナイト』に収められ、ジャズ・スタンダード化したといえるだろう。

マル・ウォルドロンのソロで演奏されているが、彼独特の“モールス信号”スタイルと呼ばれる打楽器奏法が随所で聴ける。ダークな色彩を感じさせるイントロに続き巧みにメロディをフェイクさせて聴き手の心を引き付けてしまう辺りは流石で、派手さはないが円熟味を感じさせる演奏だ。通奏低音のような左手の動きが鮮明に再現され、また、右手のアドリブ・フレーズの一言一音の粒立ちも良い。また、情報量も豊富でありピアノという楽器の魅力と表現力の幅広さを余すことなく伝えてくれるクオリティの高いサウンドだ。

☆ティーチ・ミー・トゥナイト

1953年にサミー・カーンが作詞、ジーン・デ・ポールが作曲したラヴ・ソングで、恋のABCのすべてを今夜教えてというユーモラスでロマンティックな内容の歌詞で多くのアーティストに取り上げられている。'54年にキューバ出身のカastro・シスターズのレコードがヒットし、それに続いてジョー・スタッフォード、ダイナ・ワシントンのレコードがヒットした。少し前にパティ・オースティン、サリナ・ジョーンズが取り上げ、1982年にはアル・ジャロウのレコードがヒットし話題となった。また、注目の新人女性ヴォーカリスト、ダイアン・シューアもリーダー作『ティードウルズ』の中で取り上げていたのは記憶に新しい。

ピアノの短いイントロに続き、ゆったりとしたテンポにのってブルース・フィーリングに溢れたヴォーカルが現れる。ヴォーカルのみのブレイク部もSN比が高く微妙なヴィブラートやエコー成分などのディテールをクリアーに再現する。また、ピアノのコードワークでも芯がしっかりとっていて力強いアタック音もスムーズに立ち上がり起伏に富んだマルのピアノをリアルに表現してくれる。

☆ミスティ

ピアニストのエロール・ガーナーが作曲した美しいバラードで1954年7月に自己のトリオでマーキュリー・レーベルに初録音した。その後、1955年にジョニー・バークが、霧に包まれて居るような恋の気持という内容の歌詞を書き、'59年には歌手のジョニー・マティスが吹き込みミリオン・セラーを記録した。それ以来、多くのアーティストが取り上げ名演が数多く残っているが、代表作はなんといっても『ミスティ／エロール・ガーナー』といえるだろう。この曲は我が国でも特に人気が高く数えきれないほどレコーディングされているが、これほどまでに聴きごたえのある作品は稀である。マル・ウォルドロンの陰影に富んだピアノと与世山澄子の情感に溢れたヴォーカルは聴き手の心を捕えて離さない。

サウンドは全般的に誇張感が無く、いたってナチュラルであり、豊かな二人の個性が適確に引き出されている。

ピアノの低音弦の響きは豊かで音像もしっかりしており、与世山のヴォーカルの持つ人間味なども旨く再現されるが、このあたりはアナログ76cm/sec、1/2 inchアナログ・マスターが効を奏したといえるだろう。

☆ボディ・アンド・ソウル

1930年にジョニー・グリーンがガートルード・ロウレンスのために作曲した余りにも有名なラヴ・バラッドで、作詞はエドワード・ヘイマン、ロバート・ソウア、フランク・アイトンの共作である。'39年に故コールマン・ホーキンスが演奏して以来ジャズ・スタンダード化し多くのミュージシャンやジャズ・ヴォーカリストが取り上げるようになった。サラ・ヴォーンも何度かレコーディングしているが、なんといってもビリー・ホリデイがヴァーヴに吹き込んだ名唱が特に印象に残るが、与世山のヴォーカルもそれに劣らず味わい深い。マルのピアノもしっかりと語りかけるようにヴォーカルをサポートしており、まるでビリー・ホリデイとの再会を楽しんでいるかのようだ。それほどまでに与世山のヴォーカルは日本人離れしたジャズ・フィーリングを感じさせる。

しっとりとしたラヴ・バラッドということもありレヴェルは低めだが、76cm/secのマスター・テープいつものように高音質素材を使用した45回転ディスクのため高いSN比が確保されピアノのかすかな余韻やヴォーカルの細かな表情まで鮮明に描き出される。与世山のビリー・ホリデイを彷彿とさせるハスキーなヴォーカルの特徴が良く出ているといえるだろう。

☆ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ

コール・ポーターが作詞・作曲した名作で1943年のコロンビア映画『サムシング・トゥ・シャウト・アバウト』のために作られ、主演のドン・アメチエとジャネット・ブレアが歌い同年のアカデミー主題歌賞にノミネートされている。ヘレン・メリルの十八番として知られているが、その他にもアート・ペッパーの『ミーツ・ザ・リズム・セクション』、ジム・ホールの『アランフェス協奏曲』など数々の名演・名唱がある。ここではマル・ウォルドロンのピアノ・ソロで1コーラスが演奏された後、ヴォーカルが加わるが、哀感を漂わせた与世山澄子の唱法はここでも光を放っている。また、マルのピアノ・ソロも沈鬱な表情であり彼女のヴォーカルと良くマッチしているといえるだろう。

Rチャンネルに低音部、センターからLチャンネルにかけてメロディ・ラインという定位であるが、コードとメロディの分離などで中低域の分解能を知ることができるだろう。

☆ホワット・ア・リトル・ムーンライト・キャン・ドウ

ハリー・ウッズが作詞・作曲した古い歌曲で、『月光のいたずら』という邦題で知られ、初期(1935年～1942年迄のCBS時代)のビリー・ホリデイが取り上げていた。初演は1935年7月でバックはロイ・エルドリッジ(tp)ベニー・グッドマン(cl)ベン・ウェブスター(ts)等を擁したティディ・ウィルソン楽団であった。ビリーのレパートリー中アップ・テンポの代表作といえ、ベスト・アルバムなどには必ず収められていた。

与世山澄子も快適なテンポに乗り愛らしいタッチのヴォーカルを聴かせてくれる。リズムカルなナンバーであるだけに再生装置全体の立ち上がりチェック等に使えらるだろう。また、彼女のハスキーさが強調されるか否かで高域特性を知ることができるし、ピアノのコードワークで低域の周波数特性や中低域の分解能が分かるだろう。

(小林 貢)

与世山澄子プロフィール

1940年2月29日

沖縄、小浜島に生まれる。三男三女の次女。

1949年(小3)

那覇に住む。

1952年(小6)

米軍のベース・キャンプで初舞台。

1956年(高1)

ジャズを歌い始める。

1957年

来沖したボブ・ホープとレス・ブラウン楽団と共演。訪米を勧められる。

1959年

上京、日劇のステージで絶讃を浴びるが、本土の体質に合わず、3か月で沖縄に戻る。

1963年

那覇で初リサイタル。

1967年

ジャズ・ミュージシャン(sax)我那覇文正氏と結婚。

1972年5月

沖縄本土復帰。ジャズラウンジ「インターリュード」を経営。自らの活動の場とする。

1982年2月29日

17年ぶりのリサイタル(沖縄の戦前、戦後を通じて前代未聞の大盛況を博す。)が評価され第15回沖縄タイムズ芸術選賞奨励賞受賞。

1983年5月

デビューアルバム「イントロデュース」発売好評を得る。

9月22日

渋谷東邦生命ホールで都内初のリサイタル。

1984年3月

セカンドアルバム「ウイズ・マル」発表。

1985年3月

初の関西地区ライブ・ツアー。

9月

東北地区マル・ウォルドロンとのデュオ・ツアー。

マル・ウォルドロン プロフィール

1926年8月16日

ニューヨークに生まれる。

クィーンズ・カレッジで学び、カルロ・ラトハウスに師事し、作曲を学ぶ。当時はアルト・サクソ奏者だった。

1949年～1953年

ビッグ・ニック・ニコラス、アイク・ケベック等のグループでピアノを弾く。

1954年～1957年

チャールス・ミンガスのグループに入る。

1957年～1959年

ビリー・ホリデイの伴奏者として彼女が死ぬ59年まで行動をとる。彼女との出会いはマルの音楽性に決定的な影響を与えた。

1961年～1962年

エリック・ドルフィーとブッカー・リトル5重奏団に参加。

1967年

ドイツのミュンヘンに住む。

1971年2月

来日初コンサート。

1984年3月

「ウイズ・マル」発表。

1985年9月

東北地区にて与世山澄子とのデュオ・ツアー。

11月21日

与世山澄子とのデュオ・アルバム「DUO」発表。



レコーディングにあたって

9月17、18日の深夜から朝にかけて、東芝EMIの第3スタジオでレコーディングが行なわれた。その約3ヶ月前、スタッフの方からレコーディング依頼の話があり、どのようなレコードに仕上げるかを検討することになった。まず、企画の内容が与世山さんの歌と、マル氏のピアノ伴奏だけで構成されること、ほとんどがJazzのスタンダード曲であることから、2人が協演する雰囲気そのままをアコースティックなサウンドでダイレクトに録音し、ブラック・ディスク（従来のレコード）ばかりでなく、CD（コンパクト・ディスク）にも対応できるように考えた。

これからは、'50~'60年代のJazzに戻って行く

いま現在、ジャズの本場アメリカ、とりわけニューヨークにおいて、かつて若者に人気のあったフュージョンと言われるジャズ・ロックは、数年前にそのピークを過ぎて、今やグループの数も減

りだんだん消えようとしている。当時活躍していた“ウエザー・リポート”のサクソ奏者、ウェイン・ショーターはグループ解散後、アコースティックなジャズに戻って活動しているし、久びさにニューヨークのライブ・ハウスに出演したハービー・ハンコックも、ピアノ・トリオで演奏したといわれる。例年開かれているジャズ・フェスティバルでは、今後ジャズ界をリードしていくと思われる20代の若手ミュージシャン達がやはり、1950年代から60年代のいわゆる黄金時代といわれた頃のジャズを好んで演奏している。彼らにとってこの時代は、生まれる前か、やっと生まれた頃であって、直接彼らに影響があったとは思えないが、ジャズの本質として捉え、単なるリバイバルではなしに、新しいものも取り入れながら“ニュー・バップ”という名の音楽としてこれからのジャズの主流に成り得る要素を十分に持っているようだ。

やはり音楽は心に訴えるものがなければ

このようにして、シンセサイザ等の電気楽器を多用し、派手さやカッコ良さを前面に出したジャ

ズに変わって、オーソドックスなアコースティック・ジャズがもう1度見直されてきていると言うことは、楽曲の素晴らしさ、演奏の良さを素直に表現し、聴き手に伝え、内容の濃い音楽がいつの時代にも生き続ける、という証拠ではないだろうか。日本のジャズ界も同じような傾向になっていくだろうし、ジャズに限らず他の音楽分野においても、中身を重視する点においては同様で、そろそろ日本も、ただ顔が良くかわいいだけの歌手やタレントから脱皮しなくてはいけないし、特に我々音楽業界の者にとってはこの事はきわめて重要な問題だと思う。

最近、'50~'60年代のビッグ・アーティスト達による当時の名盤が数多く復刻され、CDにもなっている。これからも引き続き発売される予定だが、これらを過去の古い音楽だと思わずに聴いてほしい。ジャズだとかポップスだとかという領域を越えて、楽しく聴けるからである。ビッグ・バンドあり、コンボあり、ヴォーカルあり。スウィングした曲は自然と体がリズムに合わせて動いてしまう。

2人のコミュニケーションを第1に考えた

こうした中で、今回レコーディングされた“DUO 与世山澄子&マル・ウォルドロン”には、以上のような考え方が背景にあって、2人のコミュニケーションがうまく行くように、アコースティックなサウンドが引き出せるように、楽器の配置やマイクを選択をした。彼女独特のフィーリングとマル・ウォルドロンの包むような優しいピアノがうまく溶け合い、ひとつの特有の世界を作り出している。それは、沖縄が持っている歴史や社会性から来ているのかもしれない。決して明かるいとは言えないが、心の底から力強く叫んでいるような彼女の歌から私は、ふと、そう思った。

レコーディングは順調に進み、お互いに良く知り尽くした曲ばかりだったこともあって、予定していた曲を2日間で収録することができた。是非一度このレコードを聴いてみてください。

最後に、この紙面をお借りして、いろいろお世話になったスタッフの方々にお礼させて頂きます。

レコーディング・ミキサー 常盤 清

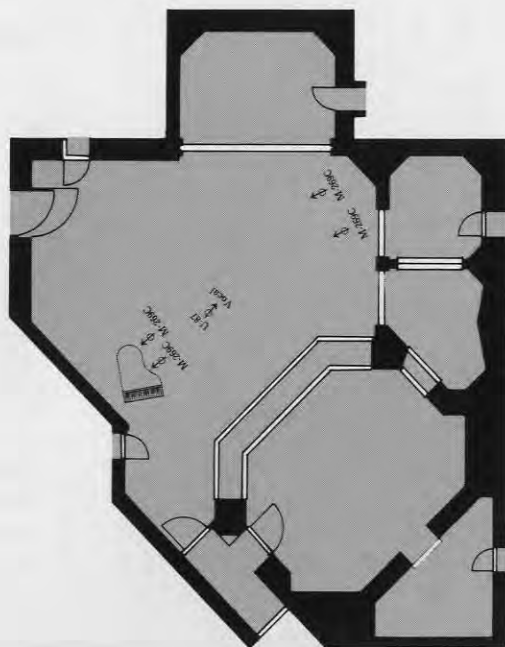
(日本フォノグラム)



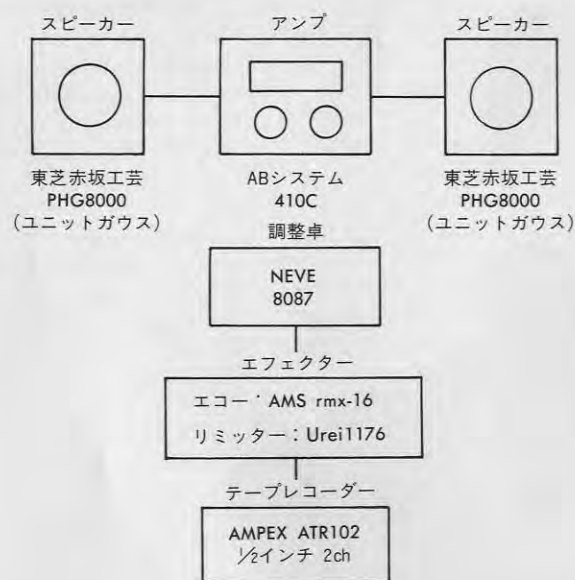
DUO 76/45

■マイク・アレンジ (東芝EMI 3ST)

Apf.....Neumann M-269c×2
Vo.....Neumann U-87
OFF.....Neumann M-269c×2



■ブロック・ダイアグラム (東芝EMI 3ST)



☆カッティング・データ

Cutting :TOSHIBA-EMI Cutting Room
Cutting Date :Oct. 9,1985
Tape Recorder :AMPEX ATR-102 1/2インチ (76cm/sec. 2ch)
Drive Amp. :Neumann SAL-74.5
Cutting Lathe:Neumann VMS-80
Cutting Head:Neumann SX-74
Diamond Cutting Stylus
Non Limiter
Non Equalizer

スタッフ

プロデューサー	: 菊地洋一郎、清野哲夫、小山正敏	録音	: 東芝EMI 3ST S.60-9-17,18
ディレクター	: 上坂計實、出口敏彦	協力	: (株)田辺音楽出版
ミキサー	: 常盤清 (日本フォノグラム)		: (株)スカイ
サウンド・オペレーター	: 柳沢一彦		: (株)スイングジャーナル社
カッティング・エンジニア	: 竹内昭五		
フォトグラファー	: 内山繁		
デザイン	: 東芝EMI(株)デザイン室	企画	: 第一家庭電器DAM
レーベル・デザイン	: (株)グラバー企画	制作・製造	: 東芝EMI株式会社

DAM/ハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク(C.D.)の開発技術によって得られた製盤の技術とノウ・ハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て制作されたものが今回のDAMレコードであります。

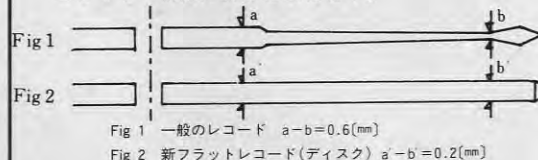
オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時ヘタをする事と針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによってはカートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。



御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を共振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比	最厚部 15%up
	最薄部 65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調

査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限がタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクオリティを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ~280μ、(L-R)、ピーク・レベル+20dB程度のもは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウ・ハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェール、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分に楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティのよいダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- (2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- (4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。
- (5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードです。ハイレベル・カッティングをしている為カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用